
旅人アーシャとクロスの夢話

藤原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅人アーシャとクロスの夢話

【Nコード】

N0788M

【作者名】

藤原

【あらすじ】

昔、とても昔にあったお話…。

「明日はどんなはなしをしてあげようか」幼い頃に聞いた一人の男の“夢話”であって“作り話”である話。そんな彼の話を聞いた子供たち。そんな“夢話”に心を打たれて探し求める一人の元子供。本当かどうか分からない、そんな終わりのない、途方に暮れる旅。彼の話を辿った旅が今始まろうとしていた…。

大きな公園の大きな木の下で

太陽が話しかけるように私たちを優しく見下ろす頃、あの大きな公園にある大きな木の下で、いつものように集う子供。

温かい木洩れ日に包まれ、一人の男が子供たちに囲まれる。

「さあみんな、今日はどんな話を聞きたいかい？」

長身で眠気を誘うようなよく通る声、伸びきって表情が掴めない前髪。

白いYシャツの袖を折り、少し大きめのズボンに身を包む、怪しい雰囲気を漂わす男だった。

「たのしいおはなしがいいなー」など「げんきになれるおはなしはー？」などと、近くで聞いたらキンキン響くような高い声が沸き上がる。

「なら、今日は楽しくて元気の出る話をしてあげよう！」

いつもこうして毎日のように、彼はこの大きな木の下で自分の“夢”の話をしたのだった。

無論、私もその一人だ。

彼の話はどんな子供も引き付けるような話ばかりで、どんなものもすぐ飽きてしまう私が初めて夢中になったのだから。

そして彼は、自分の名を「クロス」と名乗った。

無論、偽名だ。…何故分るって？

そんなこと、私にとってはとても簡単だから。

彼は私の
...

動く話

何もない“殺風景”という言葉が本当に似合う草原に、草と花と一人の旅人がいました。

だいぶ大きめの白いYシャツに、ベルトできつく締め、下を何度も織り込んだ身長に似合わない大きなズボン。

真っ白い肌に浮いて見える青みがかった黒い髪。

丸い大きな漆黒の目を細めてポツンと立っていた。

「なんだって此处には何もない……」

熱いジリジリとした太陽の日差しが、見事に旅人の体力を奪っていた。

意識が朦朧とする中、不意に何かにつまずいた。

*

*

*

無駄に広がる草原に二人の旅人が立っていた。

白いYシャツにダボツとしたズボンで、表情が掴みにくい伸びきった前髪。

白い肌に浮いて見える青みがかった黒い髪。

細く目じりの垂れた漆黒の目。

黒いつなぎに身を包み、ボサボサした髪を後ろに流し、日に焼けた肌。

鋭い目は、睨まれたら動くけなくなりそんな風貌であった。

いろんな物が垂れ下がって重そうな二輪で走る機械に跨り、途方に暮れていた。

「…何もないなあ、本当に」

汗を拭い、ふと足元を見ると、細い区切られた“道”が出来ていた。地面に倒れたハシゴのようにも見える。この無駄に広い草原に長く続いている、一直線に。

「これなんだと思う？ラーク」

「さあ？」

暑さでバテて動けなくなったラークは見もせず適当に答えた。あたりを見渡すクロス。すると、遠くから低い地響きのような音が聞こえた。

珍しく驚き、起き上がったラークが目を開く。

「なあ…なんかすげえー、早いのが…」

轟音とともに向かってくる。

「此処に居ると…危なくないか？」

不安とともに大きくなる、大きな鉄の塊。

俺はそこで見たんだよ、大きな怪物のように唸り、激しく息を吐く生き物を…

「ちよつ、とにかく下が…」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

クロスの声は掻き消され、凄まじい轟音と風と鉄の塊が過ぎて行った。

「げげげほつ、なんだありや？煙が…」

ラークが俺の背中に顔をうずめて言う。

クロスはただ茫然とその鉄の塊の後ろを眺めていた。

勿論、もう見えなかった。

「すげえー…」

…大きな怪物が俺たちの目の前を過ぎ去ったんだ。
名前は分らないけど…

その怪物は大きな煙突をつけ、黒い煙を吐きながら、あの作られた道だけを走って行った。

「なんてな。今日の話はこれでおしまい。本当にあるかは知らないけどな」

が、彼の口癖だった。

*

*

*

「いたたた…」

地面に張り付いたハシゴにつまづいた。

「何これ」

思い出す、地面に倒れたハシゴ。

（大きな鉄の塊が走る道）

「見つけたあ!!!」

思わず声を張り上げるほどだった。

嬉しさと興奮に浸っている時だ。

話で聞いた轟音、地響き、まさに想像した通り……

ほら！さらには大きな鉄の塊がこちらに向かってくるじゃない！

…向かつて？

驚異の速さ、今まで見たことがない。

ポオ――！！

つと音を鳴らし、黒い煙を吐き出しこちらに向かってくるのだ。

「うええええええええええ！？」

今頃危ないと気がついたのだ。

思わず腰が抜けて動けなくなってしまった。

鉄の塊から顔を出している人物がいる。

何かを叫んでいるが何を言っているか、全く分らない。

向かってくる、けど、速度は先ほどと違ってゆっくりになっている。

そして、1mちよつとのところで止まった。

疑問に思っているのもつかの間、鉄の塊から人が出てきた。
こちらに、恐ろしい形相で近寄ってくるなり

「何をやっているんだ！全く、馬鹿じゃないのか！？頭はちゃんと働いているのか！？」

罵声が飛んでくる、訳も分からずとりあえず謝る旅人。

「す、すみません。初めてみるもので…驚きのあまり」

「だからって線路の真ん中に立つ奴がどこに居る！？列車なんかにはかれたら、跡形も無くなって見るも無残な姿になるぞ！」

「せんろ？―れっしゃ？」

きょとんとしながらオジサンの言葉を聞いていた。

その様子に気づいたオジサンは、旅人の手を取り驚いたように言う。

「そうか…お前さんは列車を知らないんだな？旅を初めて間もないように見えるな」

「はい、まあ」

そうかそうかとオジサンは急に笑顔になり、自慢した気に“列車”

に連れ込まれた。

たぶん、長い話が始まるのだと薄々気づく旅人。

「お前さん、名はなんて言うんだ？わしは、クレトニー」

「私はアーシャ。よろしく」

それから、町に着くまで長々と列車と線路の話を聞かされた。
炭で動くとか、なんちゃらと…。

荷物を届けるのに列車はとても便利らしい。

食べ物をすぐに届けられるという。鮮度を保つのだ。

クロスの妄想夢物語は本当にあつたのだ。

これしかない街の話

だいが大きめの白いYシャツに、ベルトできつく締め、下を何度も織り込んだ身長に似合わない大きなズボン。
真っ白な肌に浮いて見える青みがかった黒い髪。

丸い大きな青緑色した目は、静かにマグカップの中身を見据えていた。

「コーヒーなんて飲めやしないのに、なんで頼んだの？変な娘だ」

琥珀色に輝く目を開け、嘲笑う様にこちらを見ている黒猫。
勝手についてきた猫だった。

「うるさいな…聞いたことがあって、挑戦したかったんだよ」

「コーヒーを知らないだなんて、やっぱり変な娘だ」

人の事情も知らずに馬鹿にしてくる黒猫。

何故猫なんか馬鹿にされなきゃならんのだ。

「あ、ねえねえアーシャ。実はね…」

*

*

*

「ようこそ！こんな街に客人がいらっしやるなんて、本当に珍しい」

とても良い笑顔で出迎えられた、“汚らしい”男2人組の旅人。

白いYシャツは土や汗で汚れて、だらしない男。
髪はボサボサだが、いい感じになっている、砂だらけの男。

「滞在ですか？移住ですか？」

門番の人に明るく声をかけられ

「2日間の滞在で」

無愛想に、迷惑そうに、面倒臭そうに返した。

二人乗りのバイクを引きずるように街中を歩いていると、美味しそうな匂いが漂ってくる。

スパイスや甘い匂い、パンを焼いている匂い…。

空腹の二人は迷いに迷った末、「カフェ」と書かれた店に寄ることにした。

「いらつしゃいませえ」

小柄の可愛い女性が出迎えた。

「オススメで、腹が満たされそうなものを…」

「かしこまりましたあ」

やはり笑顔だった。

ラークはあまりの空腹に身体を擦じらせ、まだかと俺の頭を叩いていた。

俺は頭を叩かれながら、睡魔と空腹を相手にしていた。

「お待たせしました。ブラックコーヒーとホットドックでございます。ごゆっくりどうぞ」

「コーヒー？」

運ばれてきたモノを興味津津に眺めた。
コーヒーってなんだ？

「クロス、コーヒーって何？黒いけど」

ホットドックをひと口頬張る。

「ラーク、これって飲める？」

ホットドックを貪る。

「さあ？でもなんか焼いた感じの匂いがする…」

ホットドックを半分ほど食べ終えた。

「うん、焼いた感じ…香ばしい匂いだよね」

ホットドックを食べ終えた。

「クロス食べるの早っ」

空腹だとすぐに解るほど、二人とも早かった。
似たような風貌をした二人が仲良く並んで食べていたら、双子だと

間違われてしまいそうだ。

ホットドックを食べ終えて、本題に入る。

コーヒーってなんだ？

二人で悩んで手を付けずにいると、先程の小柄の女性がやってきた。

「コーヒーは、ちゃんとした飲み物ですよお」

そう言いながらクロスとラークの間に座る。

きつと汗臭いと思われるだろうなあ…と不安になる二人にお構いなしに語り始めた。

「コーヒーとは、コーヒー豆、コーヒーノキの種子を焙煎し挽いた粉末からお湯、または水で成分を抽出した飲み物なんですよお。カフェインに代表される薬理活性成分を含むんです！」

「ええつと…、色々と聞きたいことがあるんですが…」

「全然わかんねえー。かふえいんって何？」

ラークは少し頭が弱い。多分、焙煎の意味すら解っていないだろう。さらには、常識も足りない。

「カフェインは私も解らないんです！あはは。でもコーヒーに含まれています。」

覚えてたの言葉を並べただけの説明だった。結局のところどんな味かを聞きたかった。

「どんな味がするんですか？危ないですか？」

「いいえ、平気ですよ。飲んでみてくださいよ」

なんだその、「飲んでからのお楽しみ」的なノリは…。
仕方なく“コーヒー”を口に運んだ。

ラークが横目で見ていた。ラークは飲む気すらないみたいだ。

そして飲んだ感想はというと、そう。

「にいつが!!」

苦かった。

黒いだけあつて、苦かった。

「ほらなあ！絶対美味しくなさそうだもん！」

ラークが腹を押さえて笑った。

小柄の女性は啞然として見ている。

「すみ、ません…、俺、苦いの、苦手で…」

頑なな言葉をかけると

「美味しいと思うのは個人差がありますからね…」

落ち込んだように肩を落とし、シュンとしている。
ラークが俺の背中をさすりながら

「他に飲み物、無いの？」

「あ！そうです！なんとこの街にはですねえ…」

——と小柄の女性は驚くことを言っただよ。

「さあ？この後この女性はなんと言っただと思う？」

クロスは子供たちにクイズを出した。

しかし、そのクイズには答えが無かった。

「その後俺たちは一泊して、その街を出ただよ」

「つぎはどこへいったの？」

クロスは首を横に振り

「今日の話はここまで、この後のことは皆のご想像に。それから、コーヒーはあまりオススメしないよ。まあ、本当にあるかどうかは知らないけどな」

*

*

*

「実は何よ？」

「いや、やっぱり言わないよ。その方が楽しい」

「もったいぶるなんてっ、嫌な猫お」

ぶう垂れながら、クロスの話を思い出す。

「ところでアーシャ？コーヒーって聞いたことあるのになんで飲んだことがないのさ？」

伸びをしながらこちらに近寄ってくる。

「話で聞いて、苦いって言ってたから…どれだけ苦いのかなあ…って」

「馬鹿な娘だな、本当に」

「うるさいって」

猫らしからぬ笑い方で、コーヒーをペロペロと飲んだ。

猫の下には合うらしい…、猫舌じゃないのか？

「はあ…喉乾いた…クロス言うとおりにやめればよかったなあ…。すみません、何か飲み物貰えますか？コーヒー以外で」

近くを歩いていた店員に声をかけると、自慢気にこう言った。

「我が街にはコーヒーの伝統があるのです！コーヒーを最初に作つたのは我が街であって、伝えたのも我が街です。ですから、この街にはコーヒー以外の飲み物は一切ないのです！」

「はい？」

「にやははは」

アーシャは小首を傾げて苦い顔をした。

黒猫はざまー見ろと言わんばかりに笑っている。

そのまま顎が外れてしまえ。

「見てください、あの広場に立っているオブジェ、コーヒーカップなんです。さらにはほら、あの公園の噴水はコーヒーなんですよ！だから黒いんです。」

自慢気に話した。

見当たらない話

風が冷たく肌に突き刺さる頃の話。北の方にやってきたある日のこと、見事に道に迷った話。

だいぶ大きな白いYシャツの上に厚手のコートを羽織って、黒猫を抱きながら車に乗っていた。

「寒くないか？お嬢ちゃん」

運転しているもう50歳はいくであろう、カーキという男に声をかけられた。

車はボロボロで、暖冷房が効かないらしい。

「はい、大丈夫です」

正直寒い。が、我が儘は言わない。

数分前、実のところ迷子になったのだ。

そんな所をカーキが見つけて拾ってくれたのだ。

「何言ってるの？アーシャ。ホントーは寒いくせに」

嫌味ったらしく話しかけるのは私が抱いている、そう“猫”。
いつだか勝手についてきた猫だ。

クロスの話によると、北の方に行った頃の話…。

“がっこう”という制度があるらしい所へ行きたかったのだ。

だがしかし

建物は見えない、城壁も見えない、正直何も見えない！

「お嬢ちゃんは北の方に何しに行きたいんだい？」

「少し気になっているところがあって、確かめたいと思ったんです」

「気になっていること？」

少し間を置いたのは、馬鹿にされるだろうという考えがあったからだ。

だって、一人の人間の作り話 夢話 なのだから。

「はい、北の方にある“がつこう”という制度のある国があると聞きました」

「ああ、あるよ」

あるみたい。

やはりクロスはちゃんと見てきたのだろうか…

「だが、あの国に行く方法は忘れた。近くに下ろしてあげるから…」

「何故なんだい？あんたもあの国の出身じゃないか」

黒猫が間髪入れずに質問した。

その時の声は、とても寒気がする声だった。

カーキが何故解ったつという様にこちらを見た。

「俺は確かにあの国の出身だ。だがあそこの国は嫌いだ」

黒猫は「やはりな」と言っで、また私の脚の上で目を閉じた。
何が何だか分らない私に

「お嬢ちゃん、あの国に行きたいなら、“関わり”には気をつけて」
と、忠告を受け、解らないが同意をした。

妖精の話

「疲れた」

「まだ少ししか歩いてないじゃないか…ひ弱だなあ」

最近小言の多い黒猫が言う。

綺麗な大きな湖の周りに、小屋が建っていた。

「あの小屋で休ませてもらおうよ」

「だあーめ。僕は早くマタタビの売ってい街に行きたいんだから！」

要はマタタビが欲しい黒猫は、私を小屋から離す。

いつから私はあんたの主人になったんだか…

*

*

*

晴れた雲ひとつない空。今日そんな日にも彼はあの大きな木の下で話をする。

「みんなは妖精を信じるかい？俺は綺麗な湖のほとりで見たことあるよ」

「ほんとー？」とか「わたしもみたあい」とか
近くで聞いたらキンキン響いて耳が痛くなるようだ。
いや、実際に耳が痛かった。

「そつだ！今日は妖精を見た話をしよう！」

——あれは野宿をした日のこと

綺麗な星が瞬く冬、ラークが熱を出したんだ。

そんな高熱でも無かったからそのまま旅を続けようと思ったけどね。

そうも行かずに湖の近くで休んだんだ。

「クロス…だるい…」

「わかったから、少し寝てたら？」

「どこにも行かない？」

俺のシャツの裾をまるで乙女のように摘まみ、潤んだ目でこちらを見た。

正直に言わせてもらうと気持ち悪い。

「行かないから離せ、キモい。水浴びしてくる」

「あ、俺もする。汗かいて臭いんだよ」

本当に病人か？と思うほどケロっとしている。

確かに臭いから何とも言えないし、大した熱でもないから

「…もう勝手にして」

と言った。

その頃、太陽がもう見えなくなる時間帯。

その晩、案の定ラークは本当に熱が出た。

「クロスー、だるいんだけど…」

「馬鹿は風邪ひかないって言うけど、怠惰な人は風邪ひくんだな」

呆れてツナ缶をもしゃもしゃ食べている時だ。

「ねえークロス？」

「なんだよ？」

「アレ…妖精？」

ラークの指を指した方を見ると、透明のまるで昆虫のような羽根をした人がいた。

湖で水浴びをしていたんだ。

更には光帯びて、輝いているようにも見えた。

勿論その時は、俺まで頭がやられたかと思ったよ。

「妖精だよ！」

とラーク叫んだ瞬間に、その妖精はフツと消えてしまったんだよ。

「なんてな。もしお前らも見たいのなら、湖のほとりで休んで見るといい。まあ本当かは知らないけど」

*

*

*

「…って言うわけだからさ、今日は野宿をしよう」

思い出したクロスの作り話を黒猫に話し、

「まあ、それなら良いよ。僕も見てみたい」

承諾を得た。

というより、いつから私と黒猫は一緒に旅をしているんだ？

——その晩

「星が綺麗……」

「ふう〜ん、オトメなことをたまには言うんだね」

いちいち嫌味な黒猫だった。

しかしもう慣れたのか、軽く睨んですぐに向き直った。

「あの星を見てご覧。それからあの星、その下に三つ並んでいる星があるでしょ？そしたらその下、離れているけど二つの星を結んであれがオリオン座っていう星座だ、解る？」

黒猫は星座の説明を شدした。

私も星は好きだったので、なんとなく聞き入ってしまった。

猫の話に……

「お前は詳しいんだね」

「小娘よりは長く生きておるからな」

古風な口調で言って見せた。

様になっっているのがちよっぴり悔しかったりする。

そんな事をしている間にも時間が過ぎていった。

「そろそろ寝るかあゝ」

「なんなら僕も一緒に寝てあげようか？」

「遠慮するよ」

猫にそんなことを言われても照れもしない。
そんな時だ。

「ん？ねえアーシャ…小屋の方を見て」

黒猫はそう言っで私の膝元へ来た。
言われたとおりに小屋の方を見る。

「あ…」

小屋から“ヒト”が出てきた。
だがそれは人であつて、人でない。

透明の昆虫のような羽根をつけて、玩具のステッキのような、先の方に星の形の付いたランプを持った人たちが出てきたのだ。

一見妖精のようにも見えたが、どう見ても人間だ。
だって、他にもドラキュラの格好の人もいたのだから。

「ほう、所謂コスプレというやつか」

「こすぷれ？」

「あるものにそっくりそのまま真似て変装したりすることだよ、アーシャ」

「コスチュームプレーのことね、いっちょ前に略さないで」

小屋から出て行った“妖精の格好をした人”たちは湖からどんどん離れて行ってしまった。

何をしに行ったのは分らないが、クロスが見たという妖精は…

“妖精のコスプレをした人”のことかもしれない。

やはり作り話だったのだ。（居たには居たが）

美化された話は、話のままでよかった。

「知らぬが仏というやつか？そうガツカリするな、アーシャ。妖精は心の綺麗な人間にしか見えないというからな」

「うるさい、どう意味よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0788m/>

旅人アーシャとクロスの夢話

2011年10月7日10時40分発行